

六花でパン焼いています

ものりす&0

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

星導館学園の敷地内の女子寮に近いある一件のパン屋のお話。

飯テロになりたいんだ。

目次

1 話 学戦都市でパンを焼きたいんだ

1

2 話 決闘中にカメラで撮影したいんだ

12

1話 学戦都市でパンを焼きたいんだ

「ハムサンドとコーヒーっお願いしまーす！」

「はいはい、ハムサンドとコーヒーね。はい、少し待っていてくれ」

ここは関東多重クレーター湖上に水上学園都市、六花、その形から通称、アスタリスク、とも呼ばれている学園だ。

十数年前に起こった隕石災害の隕石に含有されていた、マナダイトと呼ばれる鉱物の主成分の万能素^{マナ}の発見により発展した落星工学技術の発展により人類の科学は次のステージに昇華^{マナ}したと言っても過言ではない。

しかし、万能素は科学技術の発展だけでは終わらなかつた。その万能素^{マナ}は人類にも多大な影響を与え、その結果旧人類の身体能力、常識、ひいては圧倒的な才能を持った世代、通称、星脈世代^{ジエネステラ}を生み出した。その者達の力の根源となる星辰^{プラナ}は旧人類からすれば畏怖や忌避の対象として捉えられるのはそう遅くない話であつた。しかし、六つの統合企業財体はそこに商業を持ち込んだ。そして出来たのがこのことという訳だ。

「はい、ハムサンドとコーヒーお待ち。320円ね」

「ありがとうございます」

そして、そのアスタリスクでパン屋を経営しているのが俺、藍河鷹斗^{あおかわ たかと}26歳だ。変わった名前だとかよく言われるが生まれてこのかた一度も気にしたことはない。それはそうと、アスタリスクの朝は割と早い。今は午前6時半位ではあるが、今のようになンニングをするものもいれば、部活の練習、己の鍛錬等数えたらキリがない程多種多様である。何もしない者はまだ寮の部屋でグツスリと寝ているかもしれない。ここまで把握しているのは俺が^{アスタリスク}この卒業生だからだ。確か今の季節だと一年生のタッグ戦『^{フェニックス}鳳凰星武祭』が近いはずだ。その為か、星導館学園の敷地内にあるこのパン屋にはよくジャージ姿の一年生が朝食を買いにやこぞつてやつて来る。これまたどうしてなかなか評価はよろしく、立ち上る香りに誘われて買いに来てしまう、安くて美味しいと評判だ：少なくとも今は。

ちなみに女子寮に近い為女子生徒がよく来る。旬のピッチピチの引き締まったお肌と太股が眩しいでござる。

さらにレベルも高いので眼福である。言うことなし。異論は認めんよ。

「すまない」

「はい、いらつしやい」

おっと、誰かが来たようだ。朝でまだ少し眠たい目を擦りながらレジへと向かう。この場所は周りの木などで日陰となっているためハッキリと顔を見る事が出来ないが、ツ

ンデレな声のトーン、風になびいた美しい桜色の髪、平均サイズ程の胸。あ、この微妙にコレジャナイ感がする服装をしたこの女の子は…

「おはよう、ユリスちゃん」

「今、失礼な事を考えてはいなかったか？」

「気のせいだ。そうカツカするか何時までもポツチなんだぞ」

「う、うるさい！私のレベルについてこれないから行けないのだ！」

「あ、はい。で、ご注文はミックスサンドですか？」

「…そういうところはよく分かっているじゃないか」

この女の子はユリスIIアレクシア・フォン・リースフェルトだ。確か、リーゼルトニアとかいう王国の第一王女だった気がする。フルネームはもつともつと長いらしいが今の名前だけでも長いのにこれ以上覚えれるか。日本なら^{ジエベエン}寿限無さんレベルやぞ。お？現代にリアル寿限無さんなんて洒落にならんよ。と、まあそんな名前の事はさておき。ユリスちゃんとは二ヶ月前程に知り合った。初めて会った時は一人で如何にもポツチイ：のような雰囲気を選び帯に撒き散らしてこの店に入ってきたのが始まりだった。美しく可憐ではあったがいぎ口を開けば、まあ毒舌は出るわ出るわであの時は凄絶であった。星導館学園五位になった美少女なお嬢様だとか何かで周りにはやし立てていたせいで嫌でもその噂は聞いていたので存在自体は知っていたが、そんな噂の方

がこんなパン屋に来たのかだからその時はびつくりしたことだが、前述の通り毒舌であつたので、敬おうという気がプラマイゼロになつた事を忘れない。まあそんなお嬢様から後から聞けばここの友達が居なかつたので、静かな場所でゆっくりしたかつたそう
だ。店内は大概人はいない。それはショーウィンドウのある外で購買を済ませて行く
学生が多いからだ。その為中に俺を除く人がいる事は少ないのであ？。サンドイッチ
とパンとコーヒー位しかない店だ、立ち入つて商品をじっくり見ていく必要性がないか
らだと俺は考えている。俗に言う人力ドライブスルーの様なものだろうか？だがユリ
スはそのような店内とミックスサンドが気に入つてくれたのか3日に1度位は来るよう
になつた…のだが。

「早く作つてはくれないだろうか？私も忙しい」

「はいはい、分かつてますよー。華焰グリューエンローゼの魔女さん」

「貴様に言われると皮肉しか聞こえないのだがな」

この通り俺に対しての礼儀がなつていない。というか上から目線。毒舌を除いても、
もう少し敬おうよ、年上やぞ？お？なんていう人間の反抗意識が沸き立つたが生憎いお
うと思つたがその頃には常連であり、言おうにも言えなかつた。仮に言えたとしても
キツツイ言葉が帰ってくるのは明白であるのでその手の趣味の方ならともかく、俺はそ
んな趣味はないのでただ堪えるだけだ。せめて毒舌でもいいからもう少し優しくして

欲しいなあ、とか甘い事年下に願望する年上がここにいますよーっと。あ、さつきから同じ事しか喋ってねえやん。何だよ。と、変な事を考えながらご注文を受けたミックスサンドの2つめのマヨネーズ控えめのエッグサンドを作っていく。中が少しだけとろける程度まで茹でた玉子をナイフで押しつぶすような具合でかき混ぜつつ、そこにマヨネーズと粒マスタードを加えていき、全体的にマヨネーズが混ざりきつた物を耳を切った食パン全体にはみ出すストレスレまで挟み、斜めにカットすれば、冷えても美味しいエッグサンドの完成だ。そして三つ目のサンドイッチ、ハムサンドは：さつき作ってあったので、それを詰める。確か、ユリスは大体コーヒーを飲んでいた気がするのでカップに淹れテイクアウト用の紙袋に詰めておく。

「はい、440円ね。今日はおまけで小さいアンパン入れとくよ」

「すまないな。代金だ」

「はい、どうも行ってらっしゃい」

ユリスは言葉が終わるか終わらないかのうちに去っていった。あーあれだから友達居ないんだよ。全く。

グッと一度背伸びをする。背骨で腰骨がパキパキと音を立てて伸びていく。きつと同じ姿勢をし過ぎただけだろう。

まだこの歳でギックリ腰にはなりたくない。本当に切実にそう思う。

「さて、俺も朝食にするか…」

人も居なくなってきたので手頃に朝食を作る。

本日は新しく仕入れた玉子があるため、半熟の目玉焼きをパンにでも乗せて食べようか。あ、おかずねえ。おかずのない朝食なんか食べられるかよ。朝はキッチンと取りたい派なんだよ。

「冷蔵庫には…あー、ウインナーと玉子位しかないじゃないかよ…後で買い出しだな」

ぶつくさと自分の冷蔵庫の中の内容を見て文句を言いつつも茶色いウインナーを取り出す。赤いウインナーも美味しいけどあれは自分の中ではお弁当のタコさんウインナー専用って位置付けてるから朝食では食べないな。まあ関係ないか。

「ソーセージってボイルよりも焼く方が美味しい気がする。自論かもしれないけど茹でてる時の音よりも肉汁がパチパチ焼ける音を聞く方がお腹空くんだよな」

レジとキッチンと石窯が一体になっているスペースはとつても使いやすく特注で作ってもらったものだ。少し狭いが、自分にはこの位のスペースが1番合っていると思う。常々そう感じる。キッチンの下の収納スペースから小さめのフライパンを取り出し、コンロの上にフライパンを置いて火を最大にして点火する。直に温まるだろうからそれまでは放置だ。その間にトースターに16枚切りのパン二枚をセットして4分間の設定で焼く。そろそろフライパンが温まる頃だろうか。フライパンの上に手を翳す。

十分に熱が感じられたのでサラダ油を垂らし、すぐにフライパンを回して全体に油が行き渡らせる。火を調節した後はいつも同じところによる掛けてある円形の型を取り出しフライパンの中心あたりにセット。そこへ産地直送の新鮮な玉子を一つ静かに割り入れる。温められたフライパンによりプルプルとした白身が透明から白い色へと変わる。型の周りにソーセージを3本入れておく。こうすることによって無駄なガス代が浮く、節約術である。

「後は待つだけつと…」

先程入れたパンが焼けてきたようであの食欲を刺激するこんがりとした事が分かる匂いで鼻腔を擽ってくる。しかしトースターとガスコンロの朝の協調力理なタ器ツ具グと動いていた事もあつて額から汗がつうと滴り落ちる。と、そこへ初夏ならではの涼しい風が吹き抜ける。

この初夏の朝の涼しさはきつと後数時間で蒸し蒸しとした暑さへと変わっていくのだろう。その前に生徒が来てくれると大変嬉しい。人は何かを食べなければ生きていけない動物なのだからな。食べて、動いて、寝て、起きて、また食べる。こんなサイクルに時たまイベントがあるから人生は楽しいと自分は思う。そうだよな、これがやつぱり…

チンツ！

「おわあ!?!びっくりしたあー!」

いつの間にか4分経っていたようだ。変な悟りっぽい事を考えているとこんなにも時間が過ぎるのが早く感じるのか。学生時代に知っておきたかったもんだ。

トースターから焦げ目の少しいたパンを取り出すと皿に盛り付けていく、フライパンの玉子よ焼けていたのでフライ返しで搦いパンの上に乗せる。もう一個のパンはバターで頂きます。ソーセージも待とうと考えたが空腹の限界だ。早くしなければ俺がゲシユタルト崩壊してしまう。脳が早く食べると叫んでいる。折角熱々なんだ(主に玉子が)食べるか。キッチンスペースから出て本来はお客が使うテーブルを誰もいない事をいい事に座る。まだ目玉焼きからは白い湯気が立ち上っており熱い事をひしひしと伝えてくる。玉子だけだと物足りないのでテーブルに備え付けてある粗挽き胡椒をパツパツと振り掛ける。目玉焼きにははやつぱり粗挽き胡椒だね。醤油とかソースと塩はその後ろだ。異論がある奴は言ってみろ。俺は譲らんぞ。

と、そんな事を考えているとまた時間が無くなるので手を合わせる。

「頂きます」

まず、目玉焼きが乗ったパンから頂く。一口目はパンのザクツ!という気持ちの良い食感と白身のプルツとした独特の食感が舌の上で踊り出す。かけられた胡椒は後ろからピリツと味を引き締めさながら舞台の監督のようだ。

咀嚼すると焼かれたパンの香ばしさと中の柔らかさ、そして自身の食感がさらに強く感じさせてくれる。美味しい、美味しい、やっぱり朝はトーストだ。そして二口目へ。ガブリと大口でいく。先程の白身とパンの感触、そして今までになかったトロリとした黄身が白身とパンを自然に調和し、その美味さを引き上げる。胡椒が監督とするのならぱンは土台、白身は脇役、そして黄身は全てを纏め上げる主役と言ったところだろうか。うん、申し分無い。そのまま3口目も、4口目も、夢中で食べ続ける。

「あ、ソーセージソーセージ。忘れてた」

パンの耳の一欠片を口へ押し込むとまだ一枚パンの入った皿を手に持ちキツチンへと戻る。フライパンですつと焼かれていたソーセージはパンパンに膨れ上がっており肉汁を飛び散らせんばかりにフライパンの上で転がっていた。すかさず菜箸で少し焦げのついたソーセージを掴み上げ皿へと載せていく。その後コンロの火を落とし、もっていた席に座る。

「ではでは気を取り直して」

膨れ上がったソーセージを一本手で摘み口の中へと放り込む。噛むと溜め込んでいた熱々の肉汁がその皮を破られ口内へ広がる。すかさずバターを塗ったパンを一口。

バターと肉汁がパンに吸われ中で合わさり旨味の相乗効果を生み出していく。朝の定番はこのセットだ、と改めて認識する。ソーセージの肉厚感は男の子なら朝欲しいも

のだと思う。無意識のうちに手はソーセージに手を伸ばしており続け様に口へと放り込む。二本目もいい具合に焼けており、ちよつとついた焦げ目がパンの香ばしさとはい違、新たなアクセントを作り出す。二本目が口に入っている状態でもう一本ソーセージを口へ運ぶ。見るといつの間にかパンも食べていたようでもう残り4分の1も残っていない。なかなか良い出来であった残り少しパンをいつかしむように眺めた後、パクリと一欠片を食べてしまう。そして思う。

「自分が作ったから言うのも何だけど美味しいなあ」

美味い。それは生きていく中で大事な感情である。それが欠落したのならば人として何かを失った時だろう。昔、自分もその感情が失せかけていた時の事を思い出し、自分の言えた事じゃないなど、心の中でクスリと笑う。

種を撒いたら芽が出るように、食べたなら美味しいって思いたい。こんな学園でも誰もが美味しいものを食べたいという気持ちは誰もが同じだろう。食後のコーヒーを飲みながら天を仰ぎ、パン屋から見える青空を見上げた。

青春吹き荒れるアスタリスクにそのパン屋は今日も経営しているだろう。嵐のような編入生が来ようとも。

「…風にでも飛ばされたのかな？」

超新星は学園都市に来るべくして招かれた。

2話 決闘中にカメラで撮影したいんだ

ここのパン屋は朝を過ぎるとだんだんと客足が遠のいていく。それはここのパン屋を朝食と昼飯、あと僅かだが明日の朝飯の食パンを買っていく人しかいないので朝と昼以外は人が本当に居ないのだ。その間はゆっくりとできるはずなのだが、忌々しい事に食材が尽きてしまったので買い出しに向かわなければならぬ。否、買い出しにかりだされるのだ。

「はあああ〜しまったなあ…こんな事なら前に買い溜めしとくんだった」

朝チュンの時間はとつくに過ぎてはいるが、まだまだ正午前であり、故に学業に励むうら若き学生諸君がいない間はゆっくりとコーヒーやらドンミルクなど楽しみ、昼のための準備をする。仕事を一時の間忘れ、朝のリフレッシュタイムである。一つ書き加えるなら、人気とは言っても〃人が大量に来るわけではないよ。設備こそ良く整ったこの水上都市は東京だが、銀座等の都市のように人がごった返している訳ではなく、許可された人間、所謂学生や教師などの学園関連の者や、このアスタリスクの主体である、企業団体の社員、幹部位しか入れない為人口密度はさほど高くはない。稀に俺のような働き手を

受け入れる時もある。というか俺は半強制的にここに突っ込まれたんだけどねー。でも交通費、保険は自腹だつてさ。それと学園の緊急時には何かしら手伝わなきやならい。もちろんかどうかは知らんが報酬なんてでーへんぞ。ブラック企業かな？でも、JKの太股と千差万別の胸が見れるだけ最高と思わんかね？あ、でも俺胸平たい族は見えて見ぬ振りするよ。理由？可哀想と思わない？何なら揉んで大きくして差し上げ…。すいません何でもありません。揉みたいけどスカリますね。空気を驚掴み。エアームミモミつてありそうでないタグだよな。誰得つて話だが。

「アスタリスクってDVDレンタル少ないよなあ…。性欲を持って余す」

茶番も一板骨（第二成長期を殺した何か）のトークはここまでにして。さて、今自分はどうせかせかとお店の裏戸からギンギラギンに目をこれでもかと照り付ける外に出てきたわけだが。みんながみんなして猛ダツシュで一方向にランしているのは何故だろうか？怪しい宗教にでもハマっちゃったのかな？あれかな？一昔前に日本に電撃を走らせたポアする宗教？それともマダムが飛び付きそうな何かしらのバーゲンセール？俺、すつごく気になっちゃったので行ってみようと思う。パン作れよ自分…。とか思っちゃうのは妥協。好奇心が傾いた時は思いつきりやるのが正しいと思うんだ。そう思うわないか、その君。今、見ている君だよ。デッピーさんの第四の壁の破壊能力習得したら絶対世界は変わるけど、ずっと見られてる感があるんだよね？やだ、わたく

しめのプリチーなお肌と俺のグングニルが世界に公開されちゃうじゃん！そんな醜態をみられるなんて：くっ：：殺せ：：！（誰も期待してないし、期待もしない）

「と、考えてみたはいいが、そんな野次馬していると昼に間に合わなくなるのは明白だと思うのでこれから初めてでもないおつかいでもない買い物に行きたいと思えます！拍手！」

育ち盛りの男の子（26）がお店のためにてくてくと町へお買い物！無事に買う事は出来るのでしょうか？

：：自分の勝手なナレーションだアつとれ、伝統テーマなんてかけさせてやるもんか。自分の想像周り右してクソして寝てる。こつちはおつかい初めてでも何でもありませんですよ。ほらこんな適当なクツサイこと考えてる内に準備完了：：あれ？財布どこ行った？いや、アスタリスクって電子マネー主流だけどカード位はいるよ？そーいやカードってなくしやすいやね？遊戯王とかのデッキでばらすと次に使おうとした時そのカードに限って見つからないよな。昔私もよくやりました。ええ、ほんとに。ようやく見つかった時傷だらけで見つかって叫んだのは遠い小学生のバーロー時代のいい思い出：：良くねえな。おおつと財布見つかった。予想外奇想天外まさかのポケットからチエーンで繋がった状態で露出ウ！盗まれても言い訳できないね。

「はいはい。では中心街向けてレッツラゴー」

ドオーン。行こうとしたら大爆音。テロでも起こりました？そんなことしたら警備団体御一行様のご立派な武器引つ下げて、蜂の巣にしに来ますよ。でもってドンパチやるんでしょ。ドンドンワーワーキンキン音立ててき。他所でやってください。朝からやったら首領パッチもお怒りよ。でも白昼堂々テロする奴なんてそうそうイカレてる奴じゃないとやらないと思うので脳ミソ候補から除外。後は代わりに代行者さんが勝手にどつかに復活させといてくれるでしょう。考えた事が天使だからね。でも今の脳裏に浮かんでるのは残念ながらアテネみたいな神々しい天使じゃなくて、サリエル的な墮天使じみた考えだと思うんだ。

… 違う違う、そうじゃなくて。ちよつと探知したら万能素の流れが急速に変わって
 るんだよね。こんなに一気に万能素の流れが変わるって事は星辰力プラナーナを使ってるって
 事と同義だ。そして、この変わり方は通常の煌式武装ルークスではありえない。となると
 純星煌式武装オーガルクスか魔女や魔術師ダンテか…。ちよつと違うダンテさんはそんな装備なしで悪魔
 倒すんだもんな。怖い怖い。でもハンサムすぎて痺れる。カックイー！惚れちまいそ
 うだぜ！いやいや、実際スタイリッシュで見える人が見れば惚れちゃうけど。話がそれ
 た。爆音がしたの同考えてもさつき生徒達が走っていった方向だ…。あれ？もしかし
 て決闘してる？誰が喧嘩してるか知らんけど…。ん？爆音と万能素の急な速度変化？

「あ…」

頭の中でバラバラになっていたピースが当てはまっつていく。爆音を起こせて魔女と言えばあの人。そう、ボツチい：：違う。華焰グリューエンローゼの魔女事ユリスさんが。こりや一大事だ。炎で浮いたスカートの下にある、男のロマンを撮影しなければ。こりやあ：：ダツシユで行くしかないな。ちようど高性能カメラにちようど買い換えたばかりなんでね。拡大しても解像度が補正によつて綺麗なまんま。ちよつとした手ブレや、スカイダイビング中でも歪みは修正される機能付き。だからアルバムには綺麗な画像があるつてわけよ。その機能を知らずに最近とつた時にやけに歪みねえなどか考えて写真家の腕前あるんじゃね？と勘違いして家に帰つて機能だつた事を知つたときは頭に落雷が落ちたね。てか決闘してる場所どこよ。おや、カメラ持つた男子生徒発見伝。

早速聞いちゃおうと思います！

「あ、おいそのキミイ。決闘してる場所どこ？あ、すぐそこなのね。ありがと。サービス券上げるよ。コーヒー一杯定価で買える券。嬉しいだろ？」

話がハイスピードすぎて半分呆けてぽっかり口を開けたまんまのヤローはさておいてほおり投げて。どうやら道を真つ直ぐ行つたところで決闘をやつてるようだ。つく前に終わつてなきやいいけど。

小走りで道を行くとその話題の現場が見えてきた。

見えてきたとは言つたが、決闘現場ではなく観衆がワーワーと叫んでいるのが視界に

入っただけである。そして中心から上がる仄かな一筋の紅焔。少なくとも見積もつても10mはあるだろう。再び煌めく紅焔。ありやりや、こりやあ本気ではないけどキレてんなー……。何があつたのかしら。私気になります！それでもつて人混みをちよいちよいと掻き分けて、無理矢理前へ。

「咲き誇れー六弁の爆焔花！」

あらまありリスちゃんガチ切れ……。oh……。怖いねえ。

でつかい火球がそのままドーン……。あり？なんかこつち来てなあい？ちやうわ、前見たらお相手さん……。男だなそつち狙つてたよ。直撃しそうな決闘相手の方ご愁傷さま。君の姿は後世にお笑いだったよとでも伝えとくよ。

骨も拾つて碎いて肥料にしとくからさ、ゆつくりお休みなさい……。ん？待てよ今俺の立つてる位置は決闘相手の真後ろ……。心無しかさつきから圧迫感がないよう……。人いねえ!? チョツ、待てい！俺にも正真正銘飛び火するう！

「ああもう！くそ！」

ドカーン……。とどめることを知らない業火は相手と部外者一人を巻き込んで大きく爆ぜた……。その光景を見たギャラリーからは悲鳴と諦めの声が刹那うちに飛び交う。いくら星脈世代ジェネステラとは言え大怪我は避けられないだろう……。誰もがそう思った。

「天霧辰明流剣術初伝ー

貳蛟龍ふたつみずち！」

「はい！危ない！」

だが2人は無傷で生きていた。決闘相手は炎の花弁を十字に切り裂き、後ろの部会者Aは素手で出処不明の何かしらの技を使い見事に躲していた。ユリスちゃんはそんな部会者など目に入らなかつたかのように決闘相手が使った技に注目しているようだ。あのー……流れ弾とはいえ防いだ僕ちゃんも少しは注目しても……駄目だね。20代後半の方なんて誰も見てくれないよね！うん！

……あの決闘相手の男……よくあれを防いだね。見たところフツの煌式武装だし、流星闘技メテオアーツも使つて無いみたいだし。なかなかの剣術ですなあ。若いつて素晴らしい。と、男がユリスちゃんに真剣な表情で迫つてる！これは決まつたんじやないか？

「ん、このっー！」

ユリスちゃんもあまりの速さに対処し切れないよう……ん？武器構えてなくね？

「伏せてー！」

は？伏せて？……！なあるほど！

男の狙いが分かつたぜ！どきどきに紛れて胸揉む気だな！やるじやないか！色男！
て……違う……ユリスちゃんの立っていた位置に何か刺さっている……あの光の矢は……まさか！

「パルテナの……光の弓矢……!？」

大いに検討外れ。全く違うね。あれは真剣に考えてユリスちゃんをぶつ殺すルークス煌式武装の矢だな。長い間この学園に在籍してたので、流星に分かる。問題はそこじゃない。決闘中に誰が射ったかだ。アスタリスクのルールでは決闘に第三者が手を出してはいけない事になっているが……破ったね。ものの見事に。よく俺も破ってたから人の事言えないけどさ。決闘中の手出しはやらなかったよ。神聖な勝負は汚しては騎士の名が廃る……そもそも騎士じゃないね。騎士なのは同じ時期に一話の構成が丸かぶりだったどつかの最弱(笑)の方だね。こつちは夜も昼も一刀修羅しません。するのは俺のルークス煌式武装が流星闘技位だから。

「全く……こんな決着ありかよ…… まだ撮れてねえのによお……！あれは……！」

押し倒されたユリスちゃん、これだけでも絵になりそうだが、今は断腸の思いで無視してその前を見る。そこにはもう一本先程の矢が飛んできているのが嫌が応にも確認出来てしまった。躲そうにしてもユリスちゃんと決闘相手君は今倒れた状態で動けるわけがない。ましてや周りの生徒なんて遠すぎて間に合うわけがない。今、動けるのは自分だけしかない。誰が助けるのかはイヤでも分かってしまう。

「SIT！」

抑えておいた全身の星辰力プライナを解放して、そのままダツシユ。星脈世代ジエネステラの身体能力はとて高いので……ユリスちゃん達に矢が合わさる前にその間に割り込む。そんでもっ

て、結構速度出てる矢を掴んで…

「粉碎！」

掛け声と共に握力で粉碎する。いきなり現れた、カツコイイ、ニーサンにユリスと決闘相手君は目をパチクリさせている。そういやユリスちゃん、少年君に押し倒されて…なんてラツキーハプニングだ。カメラを取り出して記念にカシャリとな。

「少年、今君が手にしているものはなんだ？」

「…え？何って…うわああああああ！」

少年君…まさか私が考えていた事を見事にやつてくれるとは。ダイビング胸モミモミ。カメラに一枚収めさせてくれたし最高だな！今度サービスしてあげるよ。

ヤローだけど。つと、やつと思考が戻ったのか野次馬が凄いやプローチだの何だの騒ぎ出した。おい、矢を止めた俺の話はなしか。かつこよかったらう？おい！そこ！反応しなさい！

「お、お、お、おまえ…！」

ようやく胸揉みされたユリスちゃん再起動。怒りで星辰力の制御が上手く出来ていないのか、火が溢れで出してる。火傷しちゃうぜ。

「はいはい、そこまでにして下さいね」

声と共に乾いた拍手の音が辺りに鳴り響く。ふと、鬼さんじゃないけど手のなる方へ

向けると金髪で、美貌を兼ね備え…

「胸が…： インフレを起こしてやがる…：！」

そう、胸が大きかった。鷹斗はその者を知っていた。何故ならその現れたのは星導館学院の生徒会長、クローディア・エンフィールドその人だったのだから。チラツとユリスちやんを見ると可哀想な気持ちになったのは僕の慈愛だと思う。